

なっちゃんの夏

登場人物

1. 遠山冬美（3年生）
2. 野々村若葉〔夏木夏子・なっちゃん〕（1年生）
3. 東 麻由美〔山下里江〕（3年生）

4. 杉本春菜【ハルル】（3年生）
5. 森山アキ〔伊達政子〕（3年生）
6. 榊原すみれ〔細川敏子〕（2年生）
7. 野原みさ〔大内典子〕（2年生）
8. 草壁香織（3年生）

9. 浅岡三波
10. 高橋和恵

11. 松本洋子先生
12. 丸山みどり先生

※【 】はニックネーム、〔 〕は劇中の役名、（ ）は所属学年

◆ 文化祭一週間前の部室

舞台は七つ森女学院中学校演劇部部室。ただし部室といっても学校の教室を借りて部活を行っているため、部室＝教室である。部室＝教室の舞台奥は黒板がある側、上手は廊下側の壁、下手は校庭に面した窓があるという設定である。そして、そこには普通の教室のように机が並べられている。

十月のある日、その部室で文化祭で上演する『なっちゃんの夏』のラストシーンの練習が行われている。

ラストシーンに出ていない部員たちは部室の床に座って劇を見ている。

ラストシーンに登場するのは二人の少女。教室の中央で一人の少女がもう一人の少女の胸に顔をうずめて泣いている。

泣いている少女の役名は夏木夏子(演じているのは野々村若葉)。夏木夏子はみんなからなっちゃんと呼ばれている。

夏子は一年先輩の山下里江(演じているのは東麻由美)の胸から顔を起こし、恥ずかしそうに山下にお辞儀をする。

夏子は部室のドアに向かっていく。

そして、ドアのところで山下の方を振り返る。

夏子(若葉) 山下先輩。

里江(麻由美) …

夏子(若葉) (微笑みをつくって)また、明日。

里江(麻由美) (微笑まず)また、明日。

二人は見つめ合っている。

演出の冬美が手を叩いてそのシーンを終わりにする。

冬美 ご苦労様。

若葉 先輩。やっと最後まで通せましたね。

冬美 なんとかね。(あっ)アキ、いじめのシーン、もう一度やってくれない。

アキ ここんとこ、この場面の練習多くない。

冬美 なんか、いじめが本当に見えないから。アキ、もっと本気でやってくれない。

アキ (うーん)なんか若葉が相手だとさ、かわいそうになっちゃってね。

若葉 先輩、気にしないで思いっきりやってください。

アキ いいの？でもさ、あたし本気になったらほんと殴っちゃうかもしれないよ。

冬美 まあ、そうならない程度に本気でやって。

アキ (ああ)。

冬美 じゃいい？

いじめのシーンに関係のある生徒が準備をする。

冬美が手を叩く。

政子(アキ) あたしたち何やったっての。変な言いがかりつけないでよ。

夏子(若葉) お願い。もうやめて。

政子(アキ) だからさ、葬式ごっこやったの、なんであたしたちなんだよ。

そういつて夏子(若葉)の頭を押す。

夏子(若葉) 私、何も言っていない。

政子(アキ) じゃ誰がチクったの。

夏子(若葉) 私じゃない。

政子(アキ) おめー以外にいるはずないんだよ。

敏子(すみれ) 夏子、チクリ。

「夏子、チクリ」という言葉を政子(アキ)敏子(すみれ)典子(みさ)の三人が合唱するように言っていき、それが最高潮に達したところで。

夏子(若葉) やめてー。

夏子(若葉)は、そう叫んで政子(アキ)に飛びかかり、政子は倒れる。

政子(アキ) 何すんだよ。

政子(アキ)が夏子(若葉)を蹴り上げ夏子は床に倒れる。続いて政子は夏子の胸ぐらをつかんでひざ立ちにさせ、夏子を殴る。夏子は再び床に倒れる。そこに演劇部OGの浅岡三波と高橋和恵が入ってくる。

三波先輩 アキ！

そういつて二人はアキを止める。

沈黙。

二人は劇の練習中であるという状況を理解する。

三波先輩 びっくりした。本当のいじめかと思っちゃった。

アキ 先輩、ほんとにやるわけじゃないじゃないっすか。

冬美 アキ、今の良かった。

アキ (ああ)。

冬美 (まだ倒れたままの若葉に) 若葉、大丈夫？

若葉 (あっ)ぜんぜん大丈夫です。

ハルル 三波せんぱーい。お久しぶり。

三波先輩 よっ。ハルル、元気してる？

ハルル はい。

和恵先輩 (冬美に) 劇進んでる？

冬美 まあ、なんとか。今日初めて最後まで通しました。

三波先輩 ねっ、今年は何やんの？

冬美 『なっちゃんの夏』です。

三波先輩 『なっちゃんの夏』？聞いたことない劇だね。オリジナル？

冬美 (あっ)私が、インターネットから…

三波先輩 (えっ)インターネット？マッシー先生、よくいって言ったね。インターネット

の脚本大嫌いだったじゃない。

冬美 でも、この劇はよくできてるって言うてくれて。

三波先輩 そうなんだ。で、どんな劇なの？

和恵先輩 三波、今聞いちゃさ、本番の楽しみなくなっちゃうじゃない。

三波先輩 まっそうだけどさ、でも知りたいじゃん。後輩がどんな劇やるか。

和恵先輩 まあ、それはね。

三波先輩 テーマとかあるの？

冬美 テーマは…いじめですかね。

三波先輩 いじめ、重いね。

冬美 (ええ)まあ。

和恵先輩 いじめ役っているの？

ハルル はい、もちろんこの方です(アキを指して)。

三波先輩 (うなずいて)わかる。

アキ (笑って)先輩、それってどういう意味ですか。

三波先輩 まあ、そうかなって。

ハルル それとすみれとみさ。

すみれ まあ、私たちはアキ先輩に使われてるだけなんですけど。

三波先輩 ボスはアキなわけだ。

アキ 劇の中だけですけどね。

和恵先輩 それで、いじめられ役は？

若葉 (手を挙げる)

和恵先輩 (ああ、うん)

三波先輩 ねっ、主役って誰？

ハルル 主役のなっちゃん、なんと一年生の若葉なんですよ。

三波先輩 一年で主役。そいつはすごいね。

和恵先輩 (拍手して)おめでとう。

若葉 (照れて)ありがとうございます。

三波先輩 で、面白いの。

若葉 いじめがですか？

三波先輩 (笑って)そうじゃなくってさ、劇が。

冬美 面白いかどうかは…

三波先輩 冬美、面白くなくっちゃだめだよ。絶対。

冬美 (あー、はい)

三波先輩 文化祭、今度の日曜日だよ。

冬美 はい。

三波先輩 私たち、必ず見にくっから。(和恵に)ねっ。

和恵先輩 (うん)

冬美 ありがとうございます。あっ、私これから文化祭の打ち合わせがあるんで、失礼します。

冬美、教室から出ていく。

ハルル あーどうしよう。

三波先輩 ハルル、何？

ハルル 言っちゃおうかなー。

三波先輩 もったいぶんないで言いなよ。

ハルル 面白くないんですね『なっちゃんの夏』って。

三波先輩 そうなの？

すみれ まあ、まじめすぎるって感じはしますけど。

ハルル でしょ。みんな楽しんでもくれるか心配なんですよ。

三波先輩 笑いのシーンとかないの？

ハルル (うーん)ないわけじゃないんですけど。

三波先輩 面白くない。

ハルル どうでしょう。あのですね、この劇あんまりまじめすぎるんで、これじゃみんなはじめから劇見てくれないってあたし、言ったんですよ、冬美に。そしたら冬美が作者にメールしてくれて。作者なんてったっけ。

すみれ 確か、夏木夏子ですよね。主役のなっちゃんと同じ名前の。

ハルル あー、それぞれ。

三波先輩 夏木夏子？それが作者？

ハルル そういうペンネームなんですよ。

三波先輩 『なっちゃんの夏』の主役の名前が夏木夏子で作者のペンネームも夏木夏子。なんか笑っちゃうね。

和恵先輩 夏木夏子ってどんな人なの？

ハルル どんなって、会ったことないから、冬美はメールで連絡取ってますけど。

アキ どっかの先生なんじゃねーの。

ハルル (あー)そうかもしれない。なんかそれっぽいよね。(あっ)そうそう、その夏木さんから会話の中に笑いとして入れてくれってメール、冬美に送られてきたんです。で、それなんですけど…、誰か持ってない。

みさ (プリントを出して)これ。

ハルル (プリントを手にとって)これ、これ。これがその送られてきたものなんですけど、これおかしいですか？

三波先輩 (プリントを手にとって)何これ？学校の会話で使えるだじゃれ。(プリントを覗き込んで)「校長、絶好調」。

和恵先輩 (プリントを覗き込んで)「睡魔に負けてすいません」

三波先輩 うわー、どれもこれもつまんねー。(プリントを指で差して)これもだめだね。「だじゃれをいうのはだじゃれ！」

沈黙。

三波先輩 (ん？)

ハルル (笑って)先輩、「だじゃれ！」って何ですか。

三波先輩 あっそっか、「だれじゃ！」だ、「だじゃれ！」じゃわけわかんないか。

ハルル でも先輩、今の最高。「だじゃれをいうのはだじゃれ！」。先輩、いい、それいい。

三波先輩 (笑っている)

ハルル あっ、それであたしたちこの中に書かれているだじゃれを使って劇の中で使えるような会話を作ってみたんですね。

三波先輩 どのなの？

ハルル これです。

三波と和恵台本を読んでいく(あえて淡々と読む)。

三波先輩 「授業中寝てちゃだめじゃない」
和恵先輩 「ああ、京子ちゃん。睡魔に負けてすいません」
三波先輩 「校長先生が見てるよ」
和恵先輩 「よっ、校長、絶好調」
三波先輩 「こら、校長に向かってだじゃれを言うのはだれじゃー」
和恵先輩 「校長先生、どうも水酸化ナトリウム」

沈黙

和恵が笑い出す。

三波先輩 …おわり？

ハルル はい。

三波先輩 で、なに、その水酸化ナトリウムって。

ハルル 理科の実験で使うじゃないですか。

三波先輩 それはわかってるけどさ。

和恵先輩 （笑い続けて）面白いじゃん。「どうも水酸化ナトリウム」これ流行るよ。

ハルル （喜んで）和恵先輩、面白いですか？

和恵先輩 私は笑えた。

三波先輩 その水酸化ナトリウムも作者が送ってきたの？

ハルル あっ、「どうも水酸化ナトリウム」はあたしが…

三波先輩 （あー）ハルルが創ったんならわかる。でもさ、はっきり言ってこの作者、笑いの才能ないね。

ハルル いじめの劇書くくらいだから、根がまじめなんですよ。

三波先輩 でも前半に笑いがなくなるときついね。運動部の連中まじめすぎると絶対見ないよ。

悪いこといわないから、まじめすぎるのはやめた方がいいって。

和恵先輩 三波、今そんなこと言っちゃかわいそうじゃない。本番近いし、今から台本変えるの難しくない。

三波先輩 ほかには候補作なかったの。

ハルル いやー、あたしも出したんですけどマッチー先生に怒られちゃって。女学院中の恥だって。

みさ 先輩、あれは怒られるんじゃないですか。

三波先輩 どんな作品出したの。

ハルル いやー、いい作品なんです。インターネットで見つけたんですけど。笑いあり、涙ありで。

みさ ハルル先輩、涙はないんじゃないですか。

三波先輩 だから、何っていう作品。

ハルル あー。『トイレの鼻毛さん』

三波先輩 『トイレの鼻毛さん』？何それ？

ハルル 校舎三階のトイレでドアを三回ノックをして「鼻毛さんいらっしゃいますか」って聞いていくと、三番目のトイレから「はい」って返事が返ってきて、そのトイレのドアを開けると赤いスカートのおかっぱ頭の鼻毛の長い女の子が立っていて、トイレの中に引きずりこまれるんです。

和恵先輩 それじゃ「花子さん」と同じじゃない。

ハルル でも、この話、戦争と関係があるんです。戦時中、かくれんぼが大好きだった女の子

が学校内のトイレに隠れていたところ、校舎が空襲を受け、逃げ遅れて死んじゃったことで鼻毛さんになっちゃったんですね。それ話したら、マッシー先生、怒っちゃって。空襲の話の笑いにするなんてもってのほかだって。この学校で空襲にあった人たちがそれみてどう思うか考えなさいって…。

すみれ 去年の展示コンクールで最優秀賞取った三波先輩たちのクラスみたいに、ちゃんと戦争に取り組まなくちゃだめだって言われちゃったんですよ、ハルル先輩。

ハルル まあね。

三波先輩 (あー)

和恵先輩 でさ、『なっちゃんの夏』でハルルはどんな役なわけ。

ハルル あー…

アキ こいつ、はじめはいじめられてるんですよ。でもなっちゃんがハルルを助けようとするんですね。そしたらいじめがなっちゃんに移っちゃうんですよ。

和恵先輩 あー、よくある話だね。で？

アキ ハルル、あたしと一緒にってなっちゃんをいじめるんですよ。

三波先輩 嫌な性格だねー。

ハルル そうなんです。だから、正直言ってやるの嫌なんですよね。

和恵先輩 でさ、他のみんなは『なっちゃんの夏』好きなわけ？

すみれ ラストが微妙ですね。

和恵先輩 どういうこと？

すみれ 本番前にラスト、話しちゃっていいんですか？

和恵先輩 もういい、話しちゃって。

すみれ なっちゃん死ねって黒板いっぱいに書いたり、教科書をトイレの便器に捨てたり…。椅子の上にのりをべったり付けたり。

三波先輩 うっわー、残酷だね。

すみれ で、最後は葬式ごっこまでいっちゃうんですよ。机の上に菊の花が飾られちゃって、

和恵先輩 ある意味、すごいね、そこまでやるなんて。

三波先輩 それで、

アキ なっちゃんとうとう耐えられなくなって、あたしに向かってくるんですよ、でも、

三波先輩 でも…

アキ あたしが逆にぼこぼこにしちゃうんですね。

三波先輩 (あー)さっきのあれ。

和恵先輩 でさ、どうやって解決させるの、そのいじめ。

三波先輩 なんか、突然なんとかマンとか出てくるんじゃないの。

ハルル 先輩、何ですか、何とかマンって？

三波先輩 スーパーマンとか、ほらウルトラマンとか。

ハルル ウルトラマンじゃ話大きすぎませんか。

三波先輩 それじゃ、セールスマンなんてどう。

和恵先輩 三波、セールスマンでできてどうすんのよ。

ハルル (突然)そこのいじめをしている君たち。どうだいこの化粧品はいかがかな。

和恵先輩 (笑って)化粧品の販売じゃいじめ解決しないでしょ。

アキ 解決しないんですよ。なっちゃんへのいじめ、最後まで。

三波先輩 そりゃだめだよ。ちゃんと解決させなくちゃ。

アキ ですよ。あたしもそう思うんですよ。

三波先輩 そりゃそうだよ、いじめが解決しないで劇が終わったら観客は納得いかないよ。ラストだけでも変えた方がいいよ。

アキ あたしも嫌なんですよ、最後までいじめてるままなんて。あたしとしては最後に反省して、いじめたことなっちゃんに謝りたいんですよ。この役やってると、なんか自分が悪い子になっちゃう気がして、

ハルル (ぷっと吹き出す)悪い子…、悪い子って何？(三波も思わず吹き出す)

アキ 三波先輩。先輩まで何で笑うんですか。まるでそれじゃあたし悪い子みたいじゃないですか。

三波先輩 アキ、まるで悪い子じゃないみたいじゃない。

ハルル アキ、自分のこといい子だと思ってるわけ？

アキ そりゃ、いい子じゃないけど、悪い子じゃないでしょ。フツーでしょ、

ハルル フツーね…

三波先輩 いじめのシーンで劇終わりなの。

ハルル もうワンシーンあるんですよ。若葉と麻由美の。

三波先輩 どんなシーン？

和恵先輩 三波、あんまり聞きすぎると本番つまらないじゃない。そこは本番の楽しみにしない。

三波先輩 わかった、ラストのラストは本番の楽しみにとっとく。なんか見るのちょっと怖いけど。

冬美が戻ってくる。

ハルル 早かったじゃない。

冬美 今日の集まり、文化祭の連絡だけだったから。

三波先輩 そろそろ行く？

和恵先輩 うん。冬美、劇楽しみにしてっから。

冬美 はい。

三波先輩 じゃあ、みんな、がんばってね。

冬美 先輩、今日はわざわざありがとうございました。

みんな ありがとうございました。

三波と和恵が教室を出ていく。

それと入れ替わりに丸山みどり先生が入ってくる。

丸山先生 森山さん。ちょっといい。

アキ あたし？

丸山先生 ちょっとだけ。

丸山先生がアキの耳元で何か囁いている。

突然、アキが大声を出す。

アキ 校長室！センセ、なんで、校長室なの？

丸山先生 心当たりない？

アキ ありません！

丸山先生 あなた、校長先生に「よう、校長、絶好調」って言わなかった。

アキ あれは、台詞の練習です。校長先生が誤解したんですよ。だからちゃんと謝りました。

丸山先生 何て謝ったの？

アキ …

丸山先生 「どうも水酸化ナトリウム」って謝らなかった。

アキ あれは…、

丸山先生 (頭を抱える)

アキ でも、何でそれだけのことで…

ハルル アキ、どうしたの？

アキ 呼び出しだよ。校長室だって。

ハルル 校長室？

丸山先生 森山さん、行くわよ。

アキ (ふてくされて)はい。

アキが丸山先生と一緒に教室を出ていく。

ハルル アキ、ついに校長室か。

すみれ ハルル先輩、なに感心してるんですか。

ハルル 冬美、あたしアキのことちょっと見てくるから。

すみれ (あっ)私も行っていいですか。

みさ 私も。

ハルル、すみれ、みさが教室から出ていく。

教室には冬美と若葉、そして麻由美の三人が残る。

冬美 これじゃ練習にならないね。今日はこれで終わりにしようか。

若葉 はい。

麻由美は絵を描き出す。

冬美は帰りの支度を始める。

その冬美に若葉が近づいて。

若葉 冬美先輩。

冬美 何？

若葉 もし、なんですけど。

冬美 (うん)

若葉 もし、なっちゃんが先輩のクラスにいたらどうしますか。

冬美 なっちゃんが(少し考えて)…どういうこと？

若葉 もし冬美先輩のクラスになっちゃんがいたら先輩どうするかなって…

冬美 どうしてそんなこと…

若葉 クラスに、いるんです…なっちゃんみたいにいじめられている子が…

冬美 …

若葉 この劇やりながら、私、その子に何かしてあげたいって思うようになって。でも、いざ何かやろうとしても、何をしたらいいのかがわからなくて。だから先輩に。冬美先輩ならなにかいい方法を教えてくれるかなって…。それで、

冬美 その子どうしていじめられてるの？

若葉 はじめはクラスのほかの子がいじめられていたんです。そのことを担任の西川先生に相談したみたいなんですね。そしたら、西川先生、いじめてる子たちを呼び出して、お説

教して、それでその子が先生に話したってばれちゃったみたいなんです、

冬美 先生にチクったって？

若葉 はい。

冬美 いじめられてた子はどうしてるの？

若葉 今はいじめ側に入って、

冬美 助けてくれた子をいじめてるわけ？

若葉 はい。

冬美 『なっちゃんの夏』のハルルみたいに。

若葉 でも、たぶんそうするしか仕方ないんだと思うんです。そうしないと、また自分が同じ目にあうから…

冬美 若葉も怖い？

若葉 (うなずく)私、何とかしてあげたいんですけど、どうしたらいいかわからなくて…

冬美 若葉が話しかけてあげたら。教室で話すのが難しければ、電話使うとか、

若葉 それは、やってます。でも、私がどんなに相談にのってあげても、いじめがなくなるわけじゃないし…、どうしたらいいかなって…、こうしたらいじめられなくなるよって話してあげられたらなって。それで冬美先輩に…

冬美 あればいいんだけどね、そんな方法が。

若葉 私たちの劇をみることで何か変わるってことありますか？

冬美 いじめてる側が自分たちのやってることに気づくとか？

若葉 はい。

冬美 そんな力がこの劇にあればいいって思ってるけど…

麻由美 (後ろから)それは無理じゃない。

冬美と若葉が振り向く。

麻由美 いじめはいけないってみんなわかってるから。わかってるっていっても、それは「いけない」って言うとけばいいっていうことがわかってるだけでさ。

冬美 麻由美は何が言いたいわけ。

麻由美 だからさ、劇をみたくらいじゃ人の心なんて変わらないって事。

若葉 麻由美先輩、私はこの劇から何か伝えられるんじゃないかって、それで今日までがんばってきたんですけど…、

麻由美 期待しない方が気が楽だと思うけど。

若葉 …

冬美 若葉。

若葉 はい。

冬美 その子さ、部活に友達いないの。

若葉 いない、と思います。

冬美 先輩は？なっちゃんにはいたじゃない、なっちゃんをすべて受け止めてくれる先輩。ほら麻由美が演じてる…

若葉 山下先輩…

冬美 (うん)その子にはそんな先輩いないの？部活に。

若葉 その子のすべてを受け止めてくれる先輩ですか…。たぶん、いない…と思います。

冬美 そうなんだ、

若葉 …先輩。

冬美 …

若葉 (何か言おうとする、しかし思いとどまって)ありがとうございました。

若葉が教室のドアまで歩いて行き、そこで振り向く。

若葉 先輩、さようなら。

冬美 さようなら。

若葉が部室から出ていく。

それを見つめている冬美と麻由美。

暗転

◆ 文化祭前日の部室

明かりがつくと、そこは本番前日の部室。

今、いじめのシーンの練習が行われている。

夏子役は若葉ではなく香織が演じている。

政子(アキ) あたしたち何やったっての。変な言いがかりつけないでよ。

夏子(香織) お願い。もうやめて。

政子(アキ) だからさ、葬式ごっこやったの、なんであたしたちなんだよ。

そういつて夏子(香織)の頭を押す。

夏子(香織) 私、何も言ってない。

政子(アキ) じゃ誰がチクったの。

夏子(香織) 私じゃない。

政子(アキ) おめー以外にいるはずないんだよ。

敏子(すみれ) 夏子、チクリ。

「夏子、チクリ」という言葉を政子(アキ)敏子(すみれ)典子(みさ)の三人が合唱するよう
に言っていき、それが最高潮に達したところで。

夏子(香織) やめてー。

夏子(香織)は、そう叫んで政子(アキ)に飛びかかり、政子は倒れる。

政子(アキ) 何すんだよ。

政子(アキ)が夏子(香織)を蹴り上げ夏子は床に倒れる。続いて政子は夏子の胸ぐらをつ
かんでひざ立ちにさせ、夏子を殴る。夏子は再び床に倒れる。

そこにハルル演じる一人の少女が現れる。

政子(アキ) なんだ、おめーは？

少女(ハルル) あたし、鼻毛さん。遊びましょ。

政子(アキ) 鼻毛さんだって。

少女(ハルル) 遊びましょ。

政子(アキ) 来るな。来るんじゃない。

少女(ハルル) 遊びましょ。

政子(アキ) 助けて、助けてくれ！

少女(ハルル) 逃げようとしてもだめ。

政子ら三人 どうしたんだ、からだか、からだか、うごかない！

少女(ハルル) もういじめをしてはだめよ。

政子(アキ) しない、もうしないから、助けてくれ(呻き声と共に、三人は魔法にかかったように固まってしまう)。

少女(ハルル) なっちゃん、もう大丈夫よ。

政子(アキ) ありがとう、鼻毛さん。

少女(ハルル) 困ったことがあったら、またあたしを呼んで。

政子(アキ) 鼻毛さん。

二人が抱き合う。

ハルル 『なっちゃんの夏』裏バージョン、完成。

アキ 三年生はこっちの方が喜ぶかも。

冬美 (笑って)馬鹿なこと言わないで、

アキ 若葉、明日出られるの。

冬美 病気のほうずいぶんよくなって明日は大丈夫だって、松本先生言ってたけど。それにさ、(アキの耳元で何か言う、目は麻由美を意識している)

部室の前の席で絵を描いていた麻由美が顔を起こして。

麻由美 冬美、私のことなら気にしないでラスト変えていいよ。

冬美 あのシーンなかったら…

麻由美 私、あのシーンしか出番ないけど、別にあのラストにこだわっているわけじゃないし。

冬美 あのシーンは絶対必要だから、あれ麻由美にやってもらわなくちゃ困る。ごめん、脚本の設定であの役最後の一言しか台詞なくて。ほんとは麻由美にもっと台詞渡したかったんだけど…

ハルル 麻由美、裏バージョンは冗談だから。最初から遊びで創っただけだから。

麻由美 なんか、みんな勘違いしてるかなって…、私台詞一つしかないのとってもよかったんだけど…、私、舞台に立つのそんな好きなわけじゃないし…

冬美 そういわないでラストシーンやってよ。「また明日」のところ。もし明日若葉が来られなかったら、香織にやってもらわなくちゃならないから、一回香織とも合わせてもらわなくちゃ。香織、ごめんね、急に代役頼んじゃって。

香織 いいって。

ハルル 大丈夫だよ、香織プロだもん。

香織 プロって、地元の劇団に入ってるだけけど。

冬美 もしもの時はよろしくね。

香織 もしものときはね。

冬美 じゃ、ラストシーンの用意して。

麻由美が香織が準備をする。

このシーンにでない部員は彼女らを囲むようにして床に座る。

香織 (台本を読みながら) ちょっと聞いていい？

冬美 なに？

香織 要するに、これどういうシーンなわけ。

冬美 なっちゃん、いじめでぼろぼろになっちゃうじゃない。そんななっちゃんの話は演劇部の山下先輩が、ただ黙ってずっと聞いてあげるの。そして「また明日」って。

香織 (ふーん)

冬美 (あっ、) 麻由美、前からずっと言おうと思ってたんだけど、

麻由美 …

冬美 最後、「また明日」って言うところ少し笑ってくれない。

麻由美 私に笑えって、それ無理じゃない。

冬美 わかるんだけど…、あの、今日若葉いないから言うんだけどさ、最後の若葉の笑い、何かすごく不自然で、ひきつっているみたいで…

ハルル あれ、ひきつってるよ、

アキ 確かに表情硬いよ、若葉。

麻由美 …

冬美 明日、麻由美が笑ってくれれば若葉もリラックスして心から笑えるんじゃないかなって。

麻由美 …

冬美 麻由美、とにかく少しでも笑えるようにがんばってみてよ。

麻由美 …

冬美 それじゃ、始めるから。すみれ、音楽お願い。

すみれ はい。

夏子(香織)が山下先輩(麻由美)の胸に顔をうずめる形で二人静止する。

冬美が開始の合図の手を叩く。

すみれが音楽をかける。

夏子(香織)が山下(麻由美)の胸で泣いている。

夏子は山下の胸から顔を起こし、恥ずかしそうに山下にお辞儀をする。

夏子は部室のドアに向かっていく。

そして、ドアのところで山下の方を振り返る。

夏子(香織) 山下先輩。

里江(麻由美) …

夏子(香織) (微笑みをつくって) また、明日。

里江(麻由美) (微笑まず) また、明日。

冬美が手を叩いて劇を終わりにする。

冬美 麻由美、やっぱり笑えない？

麻由美 …

アキ (気軽に笑いながら) 麻由美、ただ笑って「また、明日」って言えばいいだけじゃん。

麻由美 私、アキじゃないから。

アキ （むっとする）

ハルル ちょっと、何か空気重いよ。もういいじゃん、これで。麻由美後ろ向きで立ってるんだから、観客からは表情見えないし。若葉はあたしが幕の後ろから冗談言って笑わせるから。みんな、明日本番なんだから、もっと明るくいこうよ。

松本先生が部室に入ってくる。

松本先生 そろそろ部活終了の時間だから。

冬美 わかりました。みんな集合して。

部員が冬美と松本先生の回りに集まる。

冬美 松本先生、お願いします。

松本先生 はい。みんな明日、がんばってね。それから、野々村さんから明日は来られるって連絡があったから。（みんなの反応）遠山さん、わたしからはそれだけ。

冬美 いよいよ明日は本番。若葉も明日は大丈夫なようだし、みんな、がんばろう！

みんな （それぞれ）はい。

冬美 これで今日の部活を終わりにします。

みんな お疲れ様でした。

それぞれが帰り支度をする。

麻由美は自分の机に座る。

冬美と麻由美を残してみんな帰っていく。

冬美も支度ができて帰ろうとする。

松本先生 遠山さん。

冬美 はい。

松本先生 ちょっといい。

冬美 はい…。

松本先生 野々村さんのことなんだけど…、（冬美に椅子に座るように促して）

冬美 若葉、どうかしたんですか？

松本先生 さっき野々村さんの担任の西川先生から話があって、野々村さんもしかしたらクラスでいじめにあってるかもしれないって。

冬美 いじめ…（後ろにいた麻由美も先生の「いじめ」という言葉に反応する）

松本先生 今日、西川先生のところに手紙が届いて、そこに野々村さんがどんなふうにいじめられているかが書かれていたそうなの。

冬美 それじゃ、若葉が今休んでいるのは…

松本先生 私もはっきりはわからないけど、そうなのかなって。それで野々村さんの部活の様子を知りたいと思って。

冬美 …

松本先生 遠山さん、野々村さんからいじめのこと何か聞いてない。

冬美 …聞いてません。

松本先生 そう。野々村さん明日は必ず学校に来るって言ってるから、明日の劇には出られると思うの。ただ、野々村さんがそんな状況にあるかもしれないって、気に留めておいて。

冬美 はい…、わかりました。

松本先生 東さんもよろしくね。
麻由美 はい…
松本先生 それじゃ、明日、劇がんばって。
冬美 はい…
松本先生 さようなら。
冬美・麻由美 (それぞれ) さようなら。

松本先生が部室から出ていく。

冬美 麻由美…
麻由美 …
冬美 若葉、あの時、自分のこと…
麻由美 …
冬美 私、なんで…
麻由美 …
冬美 自分のことを受け止めてくれる先輩いない…か…
麻由美 …
冬美 若葉、明日本当に来るかな？
麻由美 もし来たら？
冬美 …
麻由美 なっちゃんを演じてもらうの？
冬美 …麻由美、もしそうなったら、ラストの「また明日」、笑って言ってくれる？
麻由美 冬美…、私、笑わないんじゃないくて、
冬美 …
麻由美 笑えない…
冬美 笑えない…何で？
麻由美 …怖くて
冬美 笑うのが？
麻由美 私、もうずっと、笑ってないから。

見つめ合っている冬美と麻由美。
暗転

◆ 文化祭当日・本番後の部室

明かりがつくと、そこは『なっちゃんの夏』本番終了後の部室。
冬美が一人部室に戻ってきている。
松本先生が部室に入ってくる。

松本先生 おめでとう、すごい拍手だったじゃない。
冬美 (あまりうれしそうではなく)ありがとうございます。
松本先生 どうしたの？
冬美 なんなんでしょう。何か、上手く言葉にできないんですけど、何か違うなって。
松本先生 …
冬美 先生。

松本先生 …

冬美 先生は、本当によかったって思っているんですか。

松本先生 (少し考えて)うん。野々村さんも学校に来てくれたし、演劇部員みんな大喜びだったし。みんなよくやったよ。もちろん、あなたも。

廊下から話し声が聞こえてくる。

演劇部員たちが劇の話をしながら部室に入ってくる。

松本先生 おめでとう。劇、大成功だったじゃない。

演劇部員たちがその言葉にそれぞれ反応する。

松本先生 近藤先生、隣に座ってたんだけど、最後、ハンカチで顔拭いてたよ。

ハルル コンテニー、わかる。で、先生は？

松本先生 感動しちゃった。とくにラストシーン。

ハルル あたしチョーうれしいんだけど。あのシーン盛り上がって、

すみれ 拍手まで起こりましたね。

ハルル あんなに拍手来たの、初めてじゃない。

みさ はい。七つ森女学院中学校学演劇部、初の快挙だと思います。

ハルル ただ悔しいのは「どうも水酸化ナトリウム」が受けなかったことだなー。

すみれ あーあ。

みさ っていうか、全部だめでしたね、だじゃれの所。

ハルル まあ、劇の最後がすごい拍手で終わったからいいんだけど。

松本先生 (あっ)遠山さん、ちょっといい。

冬美 はい。

冬美と松本先生が教室の横で話を始める。

そこに演劇部OGの三波と和恵が現れる。

三波先輩 おーす。

ハルル 先輩。

部員たちがそれぞれ「先輩」などといって集まってくる。

三波先輩 (松本先生と話している冬美に)冬美。

冬美 はい。

三波先輩 よかったよ、今日の劇。

冬美 ありがとうございます。

和恵先輩 びっくりした、すごかったね。

三波先輩 まっ、劇が始まったときはどうなるか心配したけどね。会場ざわざわしてたし、台詞全然聞こえてこないし。

◆ハルル (ああ)だから、「どうも水酸化ナトリウム」うけなくて

◆三波先輩 でもあれは観客が悪いんだよ。

◆ハルル (ああ)

◆和恵先輩 でも後半はすごかった、

◇冬美 わかりました。
◇松本先生 それじゃ、
◇冬美 さようなら、

※◆と◇の台詞は同時に展開する。

松本先生 みんな、今日は本当によかったよ。いい劇をありがとう。
みんな (それぞれ)ありがとうございます。

松本先生が教室から出ていく。

和恵先輩 冬美、どうしたの。

冬美 いえ、ちょっと。

三波先輩 それにしてもすごかったね、アキの演技。あれ、アキは？なんだよ、せっかくほめてやろうと思ってたのに。

和恵先輩 私もアキの演技にはびっくりした。演技に思えなかったもん。

三波先輩 あれで一気に舞台に集中したよね。

和恵先輩 (したした！)私なんかさ、若葉が殴られてんじゃないかって、本気で心配したもん。

三波先輩 アキが地でやってるってのはわかるけど、それにしても、ねっ。

アキが戻ってくる。

三波先輩 アキ、

アキ (あっ)先輩。

三波先輩 今、アキの演技すごかったって話してたところ。

和恵先輩 まるで演技じゃないみたいだったって。とくに若葉を殴るところ。

アキ あー、

三波先輩 あれ、ほんとに殴ってるみたいだって、

アキ それが…、本当に殴っちゃったんですよ。

みんながそれぞれの驚きの声をあげる。

三波先輩 アキ、本当に若葉のこと殴っちゃったの？

アキ それで、今保健室に。若葉、口の中切っちゃったんで。

冬美 若葉、大丈夫なの？

アキ あれ、戻ってない？先に行くって言ってたんだけど。

三波先輩 なんだ、あれほんとに殴っちゃったんだ。どおりですごいと思った。

和恵先輩 だめだよアキ、ほんとに殴っちゃ。

アキ いや、あたしだって殴ろうとして殴ったんじゃないんですよ。だってあそこ何度も何度も練習したところだから。本当は若葉よけられたはずなんだけど。あたしもびっくりしちゃって。パンチがそのまま若葉に当たっちゃうなんて思わなかったから。

三波先輩 あの子の若葉の涙、そのせいなの？

アキ いやー、どうでしょう。

和恵先輩ほんとに泣いてたもんね。

三波先輩 私の所からでも、床に涙が零れるの見たし。
和恵先輩 若葉の、涙ながらに先輩に言う台詞で私もらい泣きしちゃった
三波先輩 この私でさえ泣いちゃったもんね。若葉、泣きながら、「さようなら」ってね。
和恵先輩 よかったよねー、あの「さようなら」。
三波先輩 なんか、私さ、若葉がこのままもう本当に死んじゃうんじゃないかって気がしたもん。
和恵先輩 したした。
三波先輩 この前、聞いとかないでよかったよ、最後の場面。

ずっと絵を描いていた麻由美が顔を起こしている。

ハルル 先輩。本当はあれ「さようなら」じゃなかったんですよ。
三波先輩 （えっ）そうなの？
ハルル あれ、本当は「また明日」っていう台詞だったんですよ。
三波先輩 じゃ若葉、台詞間違えたんだ。
和恵先輩 でも、誰も間違えだなんて気がつかなかったけどね。
アキ それにしても若葉、どうしたんだろう。

それまでずっと絵を描いていた麻由美が立ち上がる。
麻由美が部室から出て行こうとする。

冬美 麻由美。
麻由美 …

麻由美は冬美の方をふり返った後、何も言わずに部室から出ていく。
それを見つめている演劇部員たち。

和恵先輩 麻由美、どうしたの？（ここでハルルは麻由美の席に行き、麻由美が描いていたスケッチブックをめくって麻由美の絵を見始める）
アキ さあ。
三波先輩 そういえば麻由美、台詞一つもなかったね。
アキ 若葉が台詞間違えちゃいましたから。それで「また明日」って返せなくなっちゃって、
三波先輩 それで怒って出てったってか…。
アキ どうでしょう。麻由美よくわかんないから。
ハルル （ハルルは麻由美の机に座ってアキに麻由美の絵を見せる）麻由美が描く女の子って、みんな冷たい目してるよね。

ハルルはスケッチブックを左手で支え、右手でページをめくっていく。ハルルは左手の方向に振り返る形で絵を見ていく。そうすることによって自分だけではなくアキにも麻由美の絵が見えるようになる。更に、そうすることで麻由美の絵は観客にも見えるようになる。

アキ （あー）麻由美だからね。
冬美 ハルル、やめなよ。だまって見るの。
ハルル あれー、笑ってる。

アキ　ほんとだ。

三波先輩　笑ってる？

ハルル　これ。(三波に麻由美の絵を見せる)

三波先輩　(あれ?)その絵の女の子、麻由美じゃない(そう言って三波が絵に近づいていく)。

ハルル　麻由美？

三波先輩　(うん)そうだよ、これ麻由美だよ。

ハルル　(その絵を自分の顔の前に持ってきて、絵の後ろから麻由美になって話をする)「私、麻由美、よろしくね」

みんなが笑う。

ハルル　「私、本当は笑いたかったんだ。笑って台詞言いたかったんだ。でも、言えなかった。

私が笑って言いたかった台詞は…」

冬美　「また明日」

ハルル　「そう、また明日」

冬美　(ハルルの言葉を遮るように)ハルル！

ハルル　…

冬美　「また明日」って書いてある。ここに。

冬美が絵の一部を指す。

みんなが驚きの表情でその絵をみつめる。

その中で暗転。